

「ジャムウ（１）」（２０２０年０６月０８日）

ライター： GPジャムウ会長、ジャムウジャゴ社筆頭監査役、ジャヤ・スプラナ

ソース： ２０００年１月１日付けコンパス紙 “Jamu Masa Lalu, Masa Kini, dan Masa Depan”

ヌサンタラの島々は地球上で最大の島嶼群である。インドネシアの美しさは「赤道の真珠の首飾り」という呼び名で世界の隅々にまで知れ渡っている。この母なる地はさまざまな植物が豊かに生育することを可能にする「平和に繁栄する豊穡の地 Gemah Ripah Loh Jinawi」という環境に恵まれた。インドネシアはヨーロッパ人植民地主義者が侵入してくるはるか前から、中国・アラブ・インド商人たちに親しまれたスパイスロード交易路の交差点に位置していた。

国際交易は文化と知識の交換関係を生む。しかしインドネシアの伝統医薬文化の自立的発展に外部からもたらされた影響はきわめて小さいように見える。いや、極論するなら、皆無かもしれない。

中国やインドの伝統医薬が動物性や鉱物性の材料を調合剤の一部に含めているのに比べて、インドネシアの伝統医薬ははるかに純粋に、薬草の調合に重きを置いてきた。

幅広いバリエーションがもたらすメソッドの形態と性質が多岐にわたっているためにインドネシアの伝統医療は種々の形式を擁している一方で、インドネシアの伝統医薬にはインドネシア固有の一般名称が与えられた。ジャワ語に由来するジャムウ jamu だ。ジャムウという言葉の本質を完ぺきに定義付けるのはたいへんむづかしい。西洋の伝統医薬品と同じ概念を当てはめることができないのは、キ・ナルトサブド Ki Nartosabdho のガムラン音楽作品がベートーヴェンのシンフォニー音楽と同列に並べられないのと同じだ。それらはお互いに別々の形式と価値の基準を持っているのだから。

ジャムウはインドネシア文化の独特な一部を形成している。健康増進だけでなく美容や、ひいては性行為の面を含めて生きることの幸福と美に役立てられるものなのだ。ジャムウは実際面で、葉・花・種・茎・枝・根・芋・地下茎・樹皮など植物のすべての部分を利用する。ジャムウに優れた効果を持たせるべく、相互に効果を与え合ったり補完し合うさまざまな薬用植物のさまざまな部分が一緒に調合されるのである。人気のあるジャムウのひとつはアダス adas の種とプロサリ pulosari の茎を調合したもので、抗けいれんや収斂効果をもたらす。

９世紀に建造されたと言われているチャンデイボロブドゥル Candi Borobudur の壁画の中に、生命のシンボルであるバンヤン Kalpataru の樹を見出すことができる。その樹の近くには、粉にしたり調合したりしてジャムウを作っているひとびとの姿が描かれている。

その一群のレリーフの中に、内服にしろ外用にしろジャムウは定期的継続的に用いるよう勧める文句に加えて、大人や子供へのジャムウの用い方の説明も見られる。

ラマヤナ物語を描いたチャンディランバナナ Candi Prambanan のレリーフから、そのヒンドゥーチャンディが建てられた時代にインドネシア社会は既に薬用植物に目を開いていたことがわかる。シンタを奪い返すためにラウオノに立ち向かうラマの戦いの中で、薬用植物つまりジャムウを使うエピソードが少なくとも三回登場する。ひとつは自分の兄ラウオノに殺されたウィビソノのために、ラタマオサンディの地下茎を使って蘇生を行ったとき。もうひとつは、ラウオノの息子インドラジツの武器アジナガパサで夜中、睡眠中に密かに皆殺しにされたラマの軍勢の蘇生にラタマオサンディの強い効能が再度使われたとき。三つ目は、神通力を持つラウオノの武器デジャユダの矢がラマの腹を貫通したとき、その傷を手当てするためにウィビソノが自分の秘薬であるワトゥウルンを浸した水を使ってその治療を行うという、伝統医療が使われるエピソードの中で。植物性伝統医療を用いた伝統医療が活用されなければ、ラマとその一族、そしてかれの軍勢の戦士たちは暴虐驕慢を打ち倒すことができなかつたらう。

興味深いのは、そのすべてのケースで伝統医薬材料を探し、見つけ、運んできたのがハヌマンだったということだ。ハヌマン自身がジャムウの世界に深く関わっている背景を持っている。ハヌマンは女神アンジャニが産みの母だ。アンジャニ女神は瞑想の行を行っている最中にバタラグルの精液が降りかかっているシモンの葉を呑み込んだために身ごもってしまった。バタラバユがゲゲを溶かした水でハヌマンを水浴させたことから、ハヌマンの肉体はよく発育し、俊敏で力強くなった。[続く]

「ジャムウ（２）」（２０２０年０６月０９日）

ワヤンプルウオ Wayang Purwa の物語には、病を治し、死者をよみがえらせるほどの効能を持ち、更に繁栄と知恵のシンボルとして、全能の神通力を持つお守りの形で、クレスノ Kresna のウィジャヤクスマの花やユディスティロ Yudhistira のジャヌスカリムソドのようないくつかの植物が登場する。

生にとって大きい役割を持つアギン angin（風）についての認識は、今や最新医学が体内の空気についての関心を高めている現象に見られる通りだ。ワヤンプルウオの立役者であるスマルは自然界に並ぶ者のない腹の空気の発射パワーを持っている。つまり屁のことだ。

伝統医療の用語である masuk angin は西洋医薬分野にうんちくを持つひとびとに蔑まれてきたが、今や最新最先端の学術思想の持ち主たちの間で、それは見直されつつあるのだ。

第二ミレニアムの初期から現実生活の中でインドネシアの伝統医学はドゥクンなどの村落部で活動する専門家や王宮内にいる王や貴族層たちの信念と業績の中に保存されてきた。

ジャムウ開発の発展は古代文献の中にも謳われ、またほのめかされている。ジャワのいくつかの王宮に備えられている Serat Primpon Jampi あるいは Serat Racikan Boreh Wulang Dalem がそれで、それらは古ジャワ文字を使った手書きのものになっている。そのほかにも、Usada Sari, Kalimusodo Purate Bolong, Usada Tatenger Beling, Usada Tuwas Punggung など、ロンタルの葉にジャムウの調合法が記されたものもある。

われわれにヌサンタラの伝統医学に関する文献遺産が残されているのは、実に幸運なことである。しかしながらそれらの文献に記されている内容は、代々語り継がれてきた口承による情報よりはるかに浅いものだ。口承による情報は今や、書き留められて文書の形に集積されている。

総合的に見て、ジャムウの寄与とそれが持つ潜在性は、西洋伝統医薬（ファーマシー）が治療を重視しているのに対して、健康状態を良好に保つことで病気予防や身体強健をもたらすツールとしての面にあるという結論を引くことができるだろう。民族生活にとってジャムウは、長期的な能力を持ち、罪のない民衆の血を流すことのない平和な状況下に民族の防衛力を養うような、政治建設の一要素に擬することができる。反対にファーマシーは軍事的要素のひとつであり、能力は短期的で敵を即座に破滅させようとする破壊性を持ち、暴力的環境下に罪のない民衆の生命を奪うような危険な副次効果を伴っている。

そのため急病などの場合には、バクテリア・病菌・ウイルス・その他の感染源となる敵を倒すための攻撃的・破壊的・即効的な性質を特徴とするファーマシーによる医薬を使う方がはるかに効果的であり、賢明な態度である。

ジャムウを緊急的感染症に使うのは、完全武装の敵国軍隊に攻撃されたとき弁舌外交のみで対抗しようとするのと同じように、大きな間違いである。だから身体壮健であるときに、予防と健康増進のためにジャムウを飲む習慣をつけて、健康を犯そうと攻撃してくる敵を跳ね返す力を維持するに越したことはない。つまりジャムウとファーマシーをどっちが主人公かなどと競わせる必要はまったくないということなのだ。人間の健全な身体の維持発展のために、両者は互いの長所と短所を持って、互いに助け合い、補完し合い、満ちし合うものなのだから。

< ふたつのコンセプト >

インドネシアの伝統医薬哲学にはふたつの病気コンセプトがある。

1. 霊的側面のコンセプト

病気になるのは、次のようなことからの結果である。

- a. 先祖の墓参りをせず、あるいは墓の手入れを怠るような無関心を戒めるために、あの世から先祖が警告を与えている
- b. 誓いを破る
- c. 住居を建てる時の位置方角などや表門の前に木を植えるといった（風水と類似のもの）言い伝えられているタブーを破っている
- d. 一族の年長者からの呪いを受けている
- e. 継承されてきた先祖代々の宝器の扱いに間違いがある
- f. 敵対する者からの黒魔術や呪術を受けている

「ジャムウ（3）」（2020年06月10日）

ジャムウを使うことが、靈的側面が生み出している病気への対処方として有効であるとはかぎらない。患者はより積極的な自己反省を行い、自己の靈的な姿勢や行いを改善して靈的倫理に背かない生き方をすることがそこでは重視される。

黒魔術や呪術を除けるための除害材として、jimat, sarat, あるいはイスラミック・バリ文字・古ジャワ文字のカリグラフィが家の表門の上や呪いがかかったと思われる場所に置かれる。

2. 天然側面のコンセプト

病気 penyakit は熱い病気 penyakit panas と冷たい病気 penyakit dingin の二種類に区別されることから、処方薬も熱い薬 obat panas と冷たい薬 obat dingin に分かれる。熱い病気には冷たい薬、冷たい病気には熱い薬を用いて病を鎮めるのである。健康であるというのは体内の熱い要素と冷たい要素のバランスと調和がよく保たれていることを意味している。そのふたつの要素間の調和を作り出し、それを安定させるためにジャムウが使われるということなのだ。

その効能を求めてジャムウの調合法を発見してきた方法論として、次のようなものが挙げられている。

a. 神秘的な方法

瞑想・祈禱・超越者への願い・啓示・ドゥクンへのお告げなどを通しての創造活動が調合法を実現させた。そしてその調合法が口承（もしくは書物）で代々語り継がれてきた。中には、世代交代の中で調合法がより完成されたものになった事例もある。

b. 生態学的方法

動物の生態を観察した結果得られた知識を使って作られたもの。たとえば蛇に噛まれたサルが慌ててある植物（解毒剤）を探す姿、犬が消化促進のために木炭を食べる姿、猫がジャムウとして特定の草を食べる姿などが人間にヒントを与え、人間が試してみることでその効能が確定されるプロセスが起こった。

あるいはまた、形態学的観察に由来するものもあり、たとえば心臓の形をしている葉は心臓に薬効があるのではないかという考えを試してみたり、daun iler や sambang getih のような赤色の葉は出血に効能があるのではないかという推測に基づいて試してみることも行われた。

c. 偶発的方法

プテ pete の実はアリの大好物であるにもかかわらず、その樹の皮をアリは嫌うことにランバン・スプラナが気づき、プテの樹皮は糖尿病に効果があることが発見された。あるいはトゥンブユン tempuyung の葉が尿結石の薬効を持っていることをサルジト医師が発見した。

d. 人体化石学的方法

特定の社会集団が行っている文化習慣的行為を観察して導かれた結論がジャムウに応用された。シリの葉を噛む習慣を持っている社会集団では、ひとびとは強固な歯と歯茎を持っていることが観察の結果判明している。あるいは西ジャワ社会で食事の際に野菜の lalap を食べる習慣が、スンダ人に高血圧が少ないという結果を生んでいることなど。

e. 試行錯誤的方法

f. シナジー的方法

「ジャムウ（４）」（２０２０年０６月１１日）

< ジャムウテリア >

二十世紀の工業化時代に西洋文化方式にもとづくファーマシーの世界でジャムウの研究と開発が行われており、その結果フィットファーマシー fitofarmaka と呼ばれる新種新形態のものが生まれた。

元々ジャムウは親が子供に身体壮健を図って飲ませ、妻が夫に健康・フレッシュ・雄々しさを保つよう願って飲ませ、妻が自分自身の爽快さ・美しさ・家庭内での性的幸福を目的にして飲むものだった。ジャムウというのは最初、各家庭が我が家のジャムウを作って摂取するものだったのである。後になってジャムウゲンドン Jamu Gendong の売り子やワルンジャムウ Warung Jamu、そしてドゥクンの治療の一部として使われるような商業化の道をたどった。それらのジャムウ商業化の諸ポイントは現代インドネシアでいまだに続けられている。二十世紀初には特徴的なフランチャイズ制のジャムウテリア Jamuteria という流通方式が開発された。これはワルンでジャムウを淹れ、客がその場で飲むという方式で、コーヒーのカフェテリアに倣ったものだ。ジャムウテリアを開発したのはジャゴブランドジャムウ Djamoe Tjap Djago の一族で、中部ジャワ州ソロのシゴサレン Singosaren でスタートした。今や十数万のジャムウテリアフランチャイジーが道端ワルンや仮設スタンドから モール内のデラックス売場に至るまで、大都市のみならず地方部村落まで全国に満ち満ちている。

二十世紀初にウォノギリ村でTKスプラナという名のひとりの青年が素朴な新製品を創造した。現代的なセンスから見れば素朴なものだが、当時の歴史的価値から言うなら革命的なものだったと言えるだろう。TKスプラナはジャムウを粉末状に生産することを始めたのである。そのおかげで、ジャムウの大量生産が可能になり、ジャムウはどこへでも容易に持って行ける実用性の高いものになった。ジャムウの工業化時代はこのようにして始まった。

ジャムウジャゴ DJAMOE DJAGO というブランド名を付けた革命的な粉末ジャムウでTKS プラナは1918年にワルン事業を開始する。それを追いかけるようにして、さまざまな企業が粉末ジャムウを生産し始め、インドネシアで初の、いや世界最初のジャムウ産業共同体が作られて行った。

現在インドネシアには、インフォーマル家内工業から大規模工場を持つフォーマル企業に至る6百の生産者がおり、数千人の従業員を擁して数千億ルピア規模の事業を行っている。大規模生産者としてはNyonya Meneer, Air Mancur, Sido Muncul, Simana, Leo, Borobudur, Deltomex, Berial, Akar-Sari, Mustika Ratuなどがあって、最新鋭の生産機器を備え、ファーマシー工場とそんな色のない製造メソッドを用いて製品を世に送り出している。60年代に誕生したジャムウジャゴの子会社PT Daya Gayaはファーマシー工場にとって必須条件であるCPOBを満たしており、1997年にその資格が公式認定されている。西洋世界の自然への回帰運動に沿って人気が高まっている健康食品を、ジャムウ産業界も生産している。

非石油ガス産品のひとつとしてジャムウは、アセアン・オランダ・台湾・サウジアラビアなどの諸国向け輸出商品となる大きい潜在性を持っている。中でも、インドネシア国民海外出稼ぎ者や移住者の多い国に対する可能性は大きい。中国とインドの伝統医薬が世界中にその名を顕著にしているのは、かれらが世界のすみずみにまで移住して暮らしていることがその現象を生み出した大きい要素のひとつであるからだ。かれらはアフリカや南米の田舎にまで移り住んでいるのだ。海外移住者というのは、その民族の文化産品を異なる文化社会に紹介することにおけるスーパーハイウェイなのである。どのような輸入制限の障壁をも、それは自由に乗り越えてしまうのだから。[続く]

「ジャムウ（5）」（2020年06月12日）

このグローバリゼーション時代、中国の伝統医薬や健康食品の形で入って来る西洋伝統医薬の流入をインドネシアは免れることができない。インドネシアのジャムウに比べて中国や西洋のジャムウは、科学面での学術的公式権威や自立的海外移住者の分布というような政治的文化的優位を持っている。

中国とインドでは、ふたつの公式保健サービスのコースを国の保健政策が用意している。ひとつは東洋伝統医療に沿ったもの、もうひとつは西洋型ファーマシー方式のもので、それぞれは理論があり、学術的科学的な職業がそこに関わっていて、相互に自立できる態勢が作られている。

インドネシアで公的保健サービスは単一型、もっと言うなら西洋伝統型ファーマシーの独占形態になっている。インドネシアの伝統音楽や衣装に関するフォーマル教育の道が設けられている一方で、国民子弟に外国の同じ分野で活動しているひとびとと矜持を持って並び立つための、インドネシア伝統医薬の用法や調合の職業教育をかれらに施す公的行政的教育機関はいまだに存在しないのだ。とはいえ、研究開発が停滞しているということだ

もない。保健省が提案している西洋式学術科学的コース、つまり大学との協力を通してジャムウ生産者たちはファーマシー学術理論に沿ったインドネシア伝統医薬の研究開発、中でもフィットファーマシーという分野の中でのそれに余念がない毒素学メソッドは既にすべてのジャムウ製造工場で品質管理面に用いられており、保健省インドネシア伝統医薬監督局がその実践を管理している。業界の産業開発のうねりは、大衆に根を置く薬草活用運動を生み出している。

< 第三ミレニアム >

第三ミレニアムにおけるジャムウ産業の将来は、最近起こっている次のような社会心理環境の変化や、社会文化ならびに自然環境の変化に支えられて、十分に明るいと結論付けることができるだろう。たとえば：

a) 自然への回帰運動

全知全能の造物主は自然の中にあるすべての病にとっての薬剤を自然の中に用意したのである。ところが有限なる人知と解釈能力のために、人類はいまだにそのすべてを解き明かすに至っていない。

b) 人間の作り出すファーマシー医薬品の限界と副作用に対する認識

c) 人間の健康維持分野における東洋医学の能力に対して世界の認識が深まっていること

d) 地球上にある熱帯雨林で第二の広さを占めているヌサンタラの楽園が豊かに持っている天然資源。薬効がまだ調査されていない植物の数ははかり知れない。

しかしそのような誘導的環境の裏側には、ジャムウ産業の将来の発展を阻害するかもしれない要素が同じように存在している。たとえば：

a) 軽視できないほど強大な資本ソースの潜在性を秘めたファーマシー産業との直接的な対決

b) 中国・韓国・インドなどの外国、さらには自然回帰を果たした西洋諸国がもたらす伝統医薬製品との競合

c) 社会心理的事実としての、何世紀にもわたって植民地主義者に虐げられてきたインドネシア社会の持っている、外国製品が国内産品より優れていると狂信的に確信する傾向がもたらす外国かぶれ姿勢やビヘイビア

d) ジャムウが内在的に抱えている非西洋科学的性格がファーマシー医薬品のような西洋科学的証明を困難にしていることが、社会のジャムウに対する確信を空洞化させている。西洋科学文化の薫陶を受けた国民にはなおさらだ。自然の薬効を身上とするジャムウはそう簡単に科学分析の対象になり得ない。[続く]

「ジャムウ（終）」（2020年06月15日）

限界のある、それどころか誤謬から無縁でいられない西洋学術理論であらゆる医療メソッドが証明でき、また証明されなければならないわけでないことを西洋科学技術の世界はすでに認識し、また理解している。いかにファーマシー医薬品が権威と実績のある西洋式

学術臨床面のテストをパスしていても、人間の健康に有害な作用を及ぼしうることを事実が示している。何千人もの赤児に障害をもたらしたサリドマイド、あるいはファーマシー下痢止め薬が長期的に飲用者の視力を冒したことを忘れてはならない。ファーマシー薬品ヴァイアグラは性心理的でなく生物学的に勃起を起こさせるため、性行為の補助として無理に誤った用法を行えば、心臓や血圧に問題のあるひとには致命的なリスクをもたらす。この奇跡の薬の薬効を誤用した結果、生命を落とした者が何百人もいる。

e) 天然資源が無限にあるわけではないため、無制限な開発が行われると薬効を持つ植物の絶滅を引き起こすおそれがあるばかりか、生命連鎖をなしているエコシステムを破壊することになりかねない。

f) インドネシアの公式保健サービスは単一方式であるどころか、西洋ファーマシーと医学の独占形態を取っている。この方針が続けられるかぎり、ジャムウ産業が自由に成長発展できる機会は狭められる。2000年に施行が開始されると言われているジャムウ消費者保護法はファーマシー消費者保護法と一律の内容にされるそうで、そうなればジャムウ産業にとって弔鐘が鳴り響くことになる。

最初に失業者になるおそれの高いのは、ファーマシー医薬品生産方式での条件を満たすのが不可能なジャムウゲンドンやカキリマワルンあるいは家内産業のジャムウ生産者たちであるということをも民衆経済イデオロギー愛好者たちは覚るべきだ。ジャムウ生産の基本的観念やメソッドはファーマシー医学と根本的に異なっているのだから。

それらの様々な障害に対応するために、第三ミレニアムを迎えるジャムウ産業は予見的ステップを踏まなければならない。

a) ジャムウ製品の持続的研究開発。休むことなく新製品を生み出し、あるいは代々伝えられてきたジャムウの改善やレベルアップを図る。伝統遺産に改善の余地がないなどということはありえない。

b) 自立的な本質と形態を踏まえて、保健サービス学の形式にジャムウを標準化する。

c) 社会・産業界・実業界・生産者農民・行政の間で統合的な生活環境保全マネジメントを確立する。

d) インドネシアジャムウ産業界の人材に対して製造とビジネス能力の向上を推進する。業界の最前衛であるマーケティングのみならず、財務・情報システム・生産、そして何より重要な人材管理の能力を高めること。ヌサンタラだけでなくこの地球上の医薬品市場における競争に立ち向かう優れた人材を育て上げることは最重要課題である。

e) このレフォルマシ時代は、植民地支配者の名残を引きずる国民保健政策への全面改革を行う時である。インドネシアの独立が政治軍事面だけに限られてはならないのだ。とこ

ろがわれわれの保健政策はいまだに文化帝国主義と植民地主義に支配されている。それどころか、西洋医療ファーマシーマフィアの支配下にあるのだ。

われわれ全関係者が同じテーブルに着いて綿密な計画を作り、単一コース、ましてやモノポリでなく、インドネシア民族自身の築いてきた伝統医薬保健サービスと連合してダブルコースの国民保健サービスを整然と実行する時がいま来ている。中国・インド・チベット・ミャンマー・スリランカそしてドイツまでもがダブルコースの国民保健サービスを行い、それができるところか大きい成功を収めているのが実証されているというのに、インドネシアが追随しないでどうするのか？レフォルマシの意欲が燃え上がっているいま、国民保健サービスシステムが西洋文化の独占物になり、われわれの民族文化が継子扱いされているのは、実に不適正きわまりない。

ジャムウよ。怖れずに前進せよ。ムルデカ！[完]

「ジャムウゲンドン（１）」（２０２０年０６月２９日）

ゲンドン gendong というインドネシア語は、公式定義では背負うことを意味している。ところが実際には gendong depan という前抱きや gendong belakang 背負うことの両方に使われており、逸脱が行われている印象だ。こうなると、gendong という言葉だけに該当する日本語が存在しなくなる。

ジャムウゲンドン jamu gendong とは背負子に入れて背負って歩きながら売り子が販売するジャムウを意味しており、それを販売する売り子を指しているわけではない。正式にはジャムウゲンドン売り penjual/penjaja jamu gendong がそれを売り歩いている老若のお姉さん方を指す呼称なのだが、ジャムウゲンドンという商品がそのビジネス呼称になり、更には販売者を指すようになってしまったから、老若の売り子お姉さんをジャムウゲンドンと呼んでも差し支えはあるまい。

おまけに老若お姉さんの中には、それを背負わないで前抱きに抱えて売り歩くひともいるので、言葉の公式定義から離れて行く一方だ。言語とは融通無碍なものである。

2004年10月のある早朝、東ジャカルタ市パサルボ Parar Rebo のゲドン部落 Kampung Gedong の家々では、日の出はまだまだ先だというのに、老若のお姉さんたちはもう起き出してジャムウ作りに余念がない。このひとたちはジャムウ巡回販売の朝回りをするのである。夕方回るひとは朝普通に起きて、午前から午後にかけてジャムウの調合と煮汁作りを行う。別に営業時間が割り当てられているわけではなく、本人が朝夕売り歩きたければそうするし、金とスタミナの都合でしたくないなら、しないで済むに越したことはない。

夜明けはまだまだ先の未明に、煮汁がビンに詰められて籠に置かれると、出立の準備オツケーだ。籠に入っているのは、それだけではない。工場で作られ市販されている粉末ジャムウ、そしてハチミツに生卵。客の需要に即した商売のタネをとりそろえ、近隣の部落を巡ってルピア集めに精を出す。自分の脚と背中だけを頼りにして、その重い商品をつぎながら何キロもの距離を歩く巡回販売のたくましい女性たち。汗が全身を浸し、脚が棒になっても、ガラス瓶が空になるまで、かの女たちは歩き続ける。自己を消耗しつつした一周の成果はせいぜい2万から3万5千ルピア。でもそれが生き延びるための原資になる。

「あたしゃ、前は工場で働いてたんだけど、解雇されたの。それで叔母さんがジャムウを作って行商することを教えてくれたんで、ちょっとでも生計の足しになればと思ってこれをやってます。あたしゃ子供のころからジャムウを飲んでたから、作り方もだいたい分かってるし。ジャワ人だったらたいがいがそうでしょう。ジャワの伝統文化なんだから。」四十代と思われるウオノギリ出身のマルヤツニさんはそう語る。

ジャワの伝統文化であるジャムウがかの女の生活に生計面で役立っている。マルヤツニさんの毎日の暮らしは、今やジャムウに彩られたものになってしまった。ジャムウの素材スパイスを買い、加工し、調合し、煮汁を作る。

何を使い、どのように加工と調合を行うかは基本線で違いがないとはいえ、ジャムウ作りたちが行っているプロセスはさまざま。素材を砕く者、挽く者、細切りにする者、粉末を買って来て混ぜ合わせる者、ブレンダーを使う者。だが最終段階でできあがる煮汁は似通ったものだ。

インドネシアの自然は豊かなフローラを育んだ。3万種の植物がこの地に生育し、その中に8千種の薬用植物が含まれている。しかし伝統医薬品の素材として使われているものはまだ数百種にすぎない。ジャワ人はその伝統医薬品素材とそれで作られる製品をジャムウと呼んだ。ジャムウの代表的素材はショウガ jahe、バンウコン kencur、ターメリック ku-nyit、ジャワジンジャー temulawak、ピンクブルージンジャー temu ireng、カルダモン ka-pulaga、ナンキョウ lengkuas、ビタージンジャー lempuyang などだ。

ジャムウを用法から区分すると、擦りおろしジャムウ jamu pipis、熱湯で淹れる seduhan、煎じる infus、粉末状 serbuk、錠剤 pil、カプセル kapsul、シロップ sirup、塗布 param、湿布 pilis、肌に塗る lulur、粗いルルール mangir などがあり、その中でもっとも古くからなじまれているのが pipis と seduhan だ。ジャムウゲンドンが売り歩いているのもそれである。[続く]

ジャムウゲンドン(2)』(2020年06月30日)

使い方が異なっても、ジャムウの効能は基本的に同じであり、身体の弱った部分を回復させ、健康を維持させ、病気を予防する点にある。param、pilis、lulur、mangir は美容面に重点が置かれている。

症状に応じてジャムウの素材が選ばれる。風邪ひき masuk angin にはウイキョウ adas、マイレ pulosari、ショウガ、カルダモン、コメ、バンウコンが予防と治療に使われる。肝臓、身体の凝りや痛み、太りすぎ、肌の美容や体臭にはターメリック、タマリンド asam、ジャワジンジャーが用いられる。たいていひとつの調合ジャムウには5～15種類の素材が組み合わせられる。粉末ジャムウ生産者は薬草の根・茎・皮・葉・花・種・芋などの区分別で168種類を使っている。

ヌサンタラでのジャムウ利用は石器時代から行われていた。チャンデイボロブドゥルの壁画も、その古さを示すものだ。そこには薬用植物を砕いたり調合しているひとびとの姿が描かれている。そのレリーフには健康と生命の源泉としての自然を象徴するカルパタルの木がはっきりと彫りこまれている。

ジャムウの歴史においてその知識は最初、宮廷の貴族層だけが身体の健康と肉体の美を目的にして所有するものだった。17世紀初めにオランダ人植物学者ヤコブス・ボンティウス Jacobus Bontius が60種類の薬用植物を発見して *Histria Naturalist et Medica Indiae* と題する書物に記載した。ファン・レイデ van Rheedee がその業績を引き継いだあと、マルクに住んだルンフィウス Gregorius Everhardus Rumphius がアンボイナ植物誌 *Herbarium Amboinense* という書物の中に集大成した。日本軍政期には、*Formularium Medicamentorum Soloensis* という書物が作られている。

最初は宮廷の一族に独占されていたその知識も、そのうちに王宮の壁周辺に住むひとびとに知られるようになり、ついには一般社会にあまねく知れ渡るようになった。そのうちに商業化が行われて、タビブ tabib が治療に使い、ワルンで販売され、クバヤ姿の美女たちが売り歩くようになる。かの女たちは普通、数人グループで行商したから、最初は煮汁を詰めたビンを満載した籠を背負った大集団が部落を発ち、そのうちに行く先別に分かれて集団が縮小して行くかっこうになる様子が一般的だった。

最初は各家々で自家用のジャムウとして作られ、消費されていたものが、商業化の発展と共に工場で量産されるようになった。中部ジャワ州ウォノギリの庶民の家に生まれたTKスプラナが20世紀初頭にジャムウの粉末化に挑戦して成功したのである。かれの革命的な偉業によってジャムウはどこにでも持ち運びでき、いつでも簡単に飲むことができるようになった。かれは1918年にジャムウジャゴ Jamu Jago のブランドで大量生産を開始した。その後を追って、ジャムウ製造工場があちこちに作られるようになる。1919年にニョニヤムニール Nyonya Meneer、1951年にシドムンチュル Sido Muncul、1963年にアイルマンチュル Air Mancur、そして今やそれらの大規模生産者から家内工業に至る大小の商業用ジャムウ生産者は6百に上り、数千人の従業員を雇用している。

国民消費者のジャムウ利用も根強いものがあり、街中のあちこちにアウトレットが見られ、またメディアの宣伝広告も盛んで、業界の年間売上高は2.4兆ルピアに達している。

ジャムウ製造業界が世に送り出している製品は大別して三種類ある。伝統的ジャムウのレシピに従ったもの、伝統的ジャムウの改良型、フィットファーマシーの三つだ。フィットファーマシーとは医薬品製造規定の標準条件をクリアする植物素材を使ったもので、その三種類の製品をジャムウジャゴ社は台湾・サウジアラビア・ベトナムへ輸出している。[続く]

「ジャムウゲンドン(終)」(2020年07月01日)

今や数百種類に上るたいへん実用的なジャムウ製品が、体調が悪くなったときにすぐ吞めるピルやカプセル、あるいはシロップなどの形で市場を埋め尽くしている。ところがその簡便性でさえも、ジャムウゲンドンのお姉さんたちを駆逐することができないのだ。ジャムウ愛好者、中でも中年のひとたちは、ジャムウゲンドンの愛らしいお姉さんが持ってくる作りたてのジャムウがお好みなのである。脳裏に何が刷り込まれたのか、それともひとが目の前で注いでくれることに特別の付加価値があるのか、かれらはジャムウゲンドンの方が美味しく、そして病に対する薬効が優れていると信じている。素材の調合が最高のバランスで、しかも煮汁の濃度がぴったりだ、というのが市販粉末ジャムウと比較してのジャムウゲンドンの長所だそうだ。

「ジャムウゲendonは二種類の材料を使うだろう？たとえばチャベジャワ cabe puyang、クニルアサム kunir asem、ブラスクンチュル beras kencur だ。だから工場製の粉末ジャムウとは味が違う。要するに、実用的な粉末パックがあったらあったで、ジャムウゲendonがなくなることはない。」パサルボ住民のひとりはそのように語っている。

ところがこんな時代だ。ジャムウゲンドン売りのお姉さんのすべてが昔ながらのクバヤを着ているわけではない。商圈が広がる一方で、お姉さんたちもエネルギーが低下し、昔のように行かなくなってきた。その結果ジャムウを入れた籠をゲンドンするひと減り、小さい手押し車を使ったり、自転車に載せて回るひと出る始末だ。

「あたしも本当は自転車か手押し車で回りたいのよ。部落部落を四時間かけて歩いたあとは、背中が痛い、擦りむけてるは。でもねえ、こりゃ、あたしの選んだ道だから。お金さえありゃあねえ。」マルヤツニさんはそう述べている。

かの女のジャムウゲンドン売り人生はもう13年が経過した。かの女にとってこの商売は身体がいつまでもつのか、がひとつの鍵になっている。もうひとつの鍵は、世間がいつまでジャムウゲンドンの消費者になってくれるのか。今のジャムウゲンドン愛好者が存在するかぎりジャムウゲンドンを見捨てることがないのは明白だが、昨今の若い娘たちは健康と美容のためにジャムウを毎日飲むということをしなくなっている。親が子供にジャムウを飲ませるのに四苦八苦する時代になりつつあるのだ。ジャムウの普及力はこの先どうなっていくのだろうか、とマルヤツニさんは迷うのである。

ジャムウという商品の将来性に不安を抱いているのは、ジャムウゲンドン売りだけではない。ジャムウ産業界もその不安をひしひしと感じている。行政が、社会が、ジャムウをマージナルなものとして扱っている。「ファーマシー医薬品は一級で、ジャムウは二級品のような扱いだ。医師の処方箋に書かれるのはファーマシー医薬品が圧倒的で、フィットファーマシーですら後塵を拝しているのだから、伝統医薬品においてはなおさらのことだ。」と業界者は言う。

伝統医薬品の調査研究をもっと進めなければならないと同時に、大学の医師養成カリキュラムの中に天然医薬品に関する講座を設けることで、ファーマシー医薬品と伝統医薬品は対等性に向かって一歩前進するにちがいない。このようにしてはじめて、又サンタラで培われて来た天然素材によるジャムウ文化は未来への希望を持ち続けることができるにちがいない。[完]